

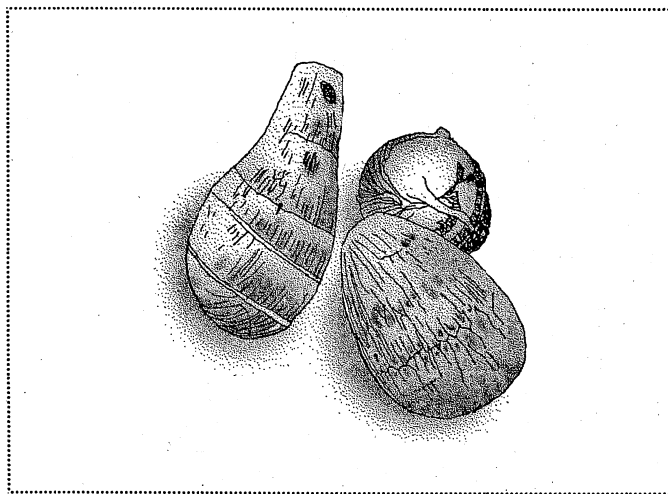
## 同じ畑の作付け避けて

——**鮫島 國親**

サトイモは親イモから子イモ、子イモから孫イモが多数生まれることから、昔から子孫繁栄の縁起物として重宝されてきました。イモにはぬめりがあり、有効な成分が多く含まれています。タンパク質、ビタミンB<sub>1</sub>、カリウムを含み、食物繊維が豊富です。鹿児島は石川早生丸（早生）、えぐ芋（中生）、大吉（晩生）などの品種が広く栽培されています。地元でとれる栄養豊富な皮付きサトイモを大いに食べたいものです。今回は早熟・普通栽培を紹介します。

生育適温は25－30度です。土壤の乾燥は収量や品質を低下させます。**4－5年は同じ畑での作付けを避け**ましょう。中晩生系は台風で株が倒れると着生しているイモが離れたり、肥大が制限されます。襲来前に風の抵抗となる葉を切り取る方法が有効です。

植え付け時期は平均気温15度以上を目安とします。**早熟栽培（マルチ）で3月、普通栽培で4月ごろ**です。本ぼには1平方メートル当たり堆肥3キロ、苦土石灰100－150グラム、化学肥料100グラム（三要素15%の場合）を目安として施します。栽植密度はうね幅110センチ、株間25センチ（早生系）－35センチ（中晩生系）とします。40－50グラムの健全な種イモを準備し、浅く溝を切り、



芽の高さをそろえてイモを置き、10－15センチ程度土をかぶせてうねを作ります。マルチ栽培は芽が出始めたら、マルチに穴をあけ、芽出しを行います。無マルチ栽培は土寄せを兼ねて夏場に1－2回追肥します。（化学肥料15グラム／回）。なお、早生系では干ばつやセンチュウなどによって生育に障害を受け、子イモが老化すると、透明化して食用に適さない通称「水晶イモ」が発生する場合があります。梅雨明け後は乾燥防止に努めましょう。収穫は早掘りで7月、**普通掘りで**

**9月ごろから**適宜行います。冬場に収穫もしくは畑で貯蔵する場合は、うね上部に土を寄せ霜対策をしましょう。収穫して貯蔵する場合は、分解しないで株のまま逆さにして貯蔵庫（温度7－8度、湿度90%）や土中で貯蔵します。

（鹿児島県農業開発総合センター副所長）

平成21年3月12日（木）／南日本新聞